

問題は、スポーツの民主主義的な発展を強く求めているものである。研究意欲を強く刺激する会で

あった。

(文責・内海和雄)

V 研究活動の概要

1. 研究活動の特徴

ロス五輪のソビエト・東欧諸国不参加問題は再び米・ソの政治対決を五輪に持ち込んだ。マスコミはスポーツへの政治の介入をこう批判する。だがその批判はスポーツ問題としてではなく、政治問題としてのみ強調される。ここにもう一つのスポーツ問題が示されている。前者の問題は政治とスポーツの関係の問題であり、後者の問題はスポーツ論、主体形成論の問題でもある。

われわれはこれらの問題を「スポーツ・文化・社会」のテーマの下に「現代スポーツの動向」を分析し、「スポーツの本質究明と主体形成」や「スポーツの現代史研究」に向けて総合的・構造的に究明してきた。

研究が進展するにつれ、個別日本（各国）のスポーツ・運動が世界のスポーツ・運動と相互関連を強くもち、この「相互関連」を解明することなしに、日本（各国）及び世界のスポーツ・運動を正しく発展させることはできないことが一層明らかになってきた。

今年度の研究活動は以下の体制でもわかる通り

川口智久氏（米国），関春南氏（西独），藤田和也氏（半年間筑波大）がそれぞれ国内・外研修に出られたので二グループ体制で進行した。第1グループ＝運動文化と主体形成，第2グループ＝社会とスポーツ・スポーツ運動。

研究会は各グループ月例会2回，時事問題検討会1回と回数を減らした他は秋合宿，春合宿は例年通り開催された。

反省点としては回数が減ったことによって研究会が間伸びし，緊張感を欠いたことがあげられる。それは日常的なグループ内活動が停滞し，事前準備が十分でなかったことに示される。

2. 研究会の運営体制

第1グループ＝唐木國彦，[○]早川武彦，内海和雄，山本唯博，高橋亨，坂入明，柴崎涼一。

第2グループ＝高津勝，上野卓郎，藤田和也，伊藤高弘，（[○]は幹事）。

尚，秋合宿では永井博氏が参加。

研究会庶務：渡辺富子，神宮美智子。

(文責・早川武彦)